

## 寺田博士の手紙

桑木或雄

寺田博士とは、博士が大学の二年生となられた頃から知るようになった。そのとき私は既に卒業し、ドツェント〔大学教官〕の末席にいた。しかし、何かの機会と同君（以下、敬称を廃し、云慣れた「君」という字を用いることをゆるされたい）の英語の力が人に優れていることを知り、また同君が藪柑子と称する俳人でもあることなどを聞き、夙くその多才に驚いていた。同君が専門の知識に豊かであったことは、その頃、明治三十年代に、五高の学生時代からすでに、雑誌『ネーチュアール』の購読者であったということにも知られていた。同君は明治三十六年、東大理学部（当時理科大学）の物理学科が初めて理論と実験との二専門学科に分れたとき、実験物理学科の第一回生として卒業し、直に大学院に入り、先ず磁気の研究に従事されたのであるが、かたわら、周知のように夙に音楽の趣味の深かった同君は、長さ二十センチ位の木で船の模型を造り、これを叩いて音を聞き、また模型の幾分を水に浸けて、振動数の変化を見るなど、その鮮やかな研究振りは、傍観者にも印象の深いものであった。やがて私は日露戦争で召集され山形の連隊へ入営した。その補充大隊第何中队第何班宛の端書や手紙を始めとして、爾後三十余年間、多忙な同君が種々の機会に恵まれた通信はかなり数多いが、同君の友人がすべて経験されたと思われるように、皆一字一字丹念に行書体で美しく書かれ、文句も面白く、ちよつとした書信の端にも、「東京は一両日来暑氣急に相加わり庭の鳳仙花が目に見えてずんずん延び候」などあり、私も同君の書信はことごとく注意して保存するようにした。私は日露戦争で入営し、除隊後、海外に留学、同君も少し遅れて出発、明治四十一、二年の頃、べ

ルリンでプランクの講義を一緒に聞いたこともあり、一夜、ティヤガルテンの夏劇場でフリーゲンデ・ホレンダーのオペラと一緒に見物したのを名残として、その翌日私はベルリンを立ち、同君より一足先きに帰朝の途についた。その後私は九州に在り、時折り上京の序（い）に相遇うに過ぎなかつたが、それだけに書信で所用を弁ずることが多かつた。用事というも次に掲げる類で、閑文字に過ぎないが、同君の面目の一部を示すものであらうと思ひ、古いのや新しいのや多くの端書や手紙の中から一般的にも興味のありそうな文句を集録して見る。

同君の学生時代の書信も一二通あつたが、不幸にして散失した。私の入宮時代に送られた書信に、「……朝寒の起床唼（ラッパ）夜寒の就床唼如何に御聞きなされ候や、しばらくは種々御難儀の御事と存じ候……追々時候は十七文字の時候と相成り候。御作あれば拝見致し度候。……」「……もう余程兵營生活の味も御わかりの事と存候。……いまは丁度時候がよいから練兵の休みに秋草の上になほころび月山の夕日を見るなども宜しく候え共、追々寒くなると御難儀の事と存候。……東京は雨勝ちにて何だか蒸暑い日が多く秋雨のしんみりした趣もなく、これが日本の首府かと思ふ泥濘の街頭に景氣のよいのは号外屋ばかり、……先達て中は測地のヘッケル来朝、g〔重力〕とマグネ〔磁氣〕をやり候、時節柄こつちも負けず Simultaneous をやり、大に国威を發揚致し候、館〔田中館愛橘〕先生も大分油を取つてやつたとの事、ヤパン〔日本〕も存外馬鹿にはならぬと歸つてから話し可申候、帝国万歳。……」「……大学の池のまわりも追々冬枯れの景色にかわり行くさまにて十七文字の好時節となり候え共、其氣にもならず候。東京も別に変つた事もなく候。昨夕富坂を通りかかり砲兵工廠を見下して暫時ぶらつき候。青白い物凄しいアークの光は、しめつた重い夜の空気を浸して居る中に大きな烟突（エントツ）が怪物の様に突立つて其下の建物には血の色をした焰がひらめき、大小高低数限りない金属のふれ合ふ音と深い沈んだダイナモ〔発電機〕の音などが一種の音楽の様に聞え、しかもそれは日露戦争の大悲曲を奏して居る様に聞え申候、……」

大正の初の頃の、「……此頃はマツハの「感覺の分析」の米訳をポツポツ読んで居ますが兎も角も大變面白い

本だと思いません。随分議論でもして見たいような処もありますが矢張り感心する処が多く、色々の暗示を与えられて居ります。小供の時、吹矢で小鳥をねらつて歩いたとき、矢の命中する時は、矢の命中する前の瞬間に必ず命中するという予覚があることを経験しましたが、マツハの本を読んで此れが一種の時間の前後に関する錯覚によるものだろうと思われて面白く感じました。中学校の五年の時に歴史の先生から「お前は是非文科へはいつて心理学をやれ」とすすめられた事がありました。それから二部へはいつて今日までつい心理学がどんな者だか知りませんでした。マツハを読んだら何だか心理学もかじり度くなりました。しかしあんまり浮気ばかりしても悪かろうと思つて我慢して居ります。それでも娯楽としてならかまうまいという口実で此間丸善へ行つた時ウィリアム・ジェームスの小本を持つて帰りました。マツハがすんだら読んで見たいと存じて居ます。……」

大正九年アインシュタインの名がようやく喧伝された頃、「……クリストは人間に栄光を授けたと同時に人間に最大の侮辱を与えました。同じようにアインシュタインも人間の為に最上の栄冠をかち得たと同時に人間という生物に最大の侮辱を与えました。二人共猶<sup>ユダヤ</sup>太人であります。コンナ変哲学を寝て居て考え出したのですが、此の辺には誰れも理解してくれる人がないから大兄の処までわざわざ御報告致します、御一笑。……」私も理解し難く質問したと見えて、他の葉書に、「……此前に申し上げた事を別の言葉で申し上げます、クリストは人間に罪人という自覚を与えた。アインシュタインは人間の五官の無能を強く指摘した。それで或る意味で人間を侮辱したという謎々でありました。御一笑。当地八日に降雪、本日北西の強風が北向の屋根に消え残つた雪を吹き散らしました。此の大風の中で普選のデモンストラチオンが行われた事と思ひます。近頃は中々色々の行列が盛んで、先日は下宿屋征伐の行列さえありました。」

絵画の批判に、「本日秋晴、上野へ参り院展見物、大変な人にて感心致候、二科は先日一見、どうも自分だけでは可也新しいつもりで居ても此絵葉書（古賀春江）のようなのや、もつともつと変なのが大多数なので批判が戸迷

いを致し候、……「空中の感情と物理」などというのになると流石の「物理」も慟哭する事と存候、此の絵なども  
 もし「器械」に靈あらば矢張泣くだろうと同情に堪えず、尤も物理学者の見た「自然」も同様か。此の絵と並んで  
 居る誰かの何とか題する絵には、ポーラリスコープで見たアイソクロマチック・カーブの模様などがゴチャゴチャ  
 と並べてあるかと思うと鳥籠の中に裸の女が居て、それは写実的にかいてある。世界が気が狂って居るか、こっち  
 が狂って居るか、どちらかでありましょう。」またこれよりも数年前のに、「……帝展は昨日一寸参りましたが子供  
 づれでゆるゆる見る暇もなく、ほんの一見したばかりですが、日本画洋画共面白いものがあるようにて、日本画の  
 方に幾分新しい気分が注入されたように御座候。事によると今年の院展よりも面白いかも知れません、院展もシッ  
 カリしないとけんのと存候、小生の個人展覧会でもやると院展のみならず帝展があふなくなりまずから先ず先ず  
 遠慮しておきましょう。もし少弟死去の際は展覧会（牛頓祭の日にも）を開いて下さる様に御願致します……」  
 又、「……夏目先生が亡くなられてから、もう何処へも遊びに（純粋な意味で）行く処がなくなりました。小弟の  
 廿歳頃から今日迄の廿年間の生涯から夏目先生を引き去ったと考えると残ったものは木か石のようなものになるよ  
 うに思います。不思議なことに私にとっては先生の文学はそれ程重要なものでなくて唯の先生其物が貴重なもの  
 がありました。一週忌までに先生に関する知友門人の書いたものを集めて出版し遺族に捧げる計画がありますので是  
 非共それに何か少し長いものを書く積りで居ます、出来たら御笑覧を祈ります。先生の命日故、毎月九日に先生の  
 御宅へ寄って生前の事を話したりする会が出来ました。昨日が第一回でしたが私は差支えて欠席致しました。……  
 私は十一月末に胃に出血があつて、夏目先生の危篤に瀕した日に胃潰瘍の宣告を下され、一時スツカリ悲観してし  
 まいましたが幸に経過がよくて先ず差し当危険はとれましたが、なんだか多少心細くなりました。大した事ではな  
 いそうですから御心配下さらぬ様に願上ます、……」此手紙は大正六年一月十日附で、その中にもあるように、胃  
 潰瘍で一時危険を伝えられたが、一年余休養して幸に回復し、十二年大震災後、同君が研究方面にも文筆方面にも

非常に元気であつたことはここに記すまでもない。二、三年前、私が、大学新聞から依頼されて、同君が岩波文学講座に書かれた「文学と科学」の紹介を同新聞に掲げたとき、「昨日大学新聞拝見、出たらの変痴奇文学論御紹介下さいまして難有<sup>ありがと</sup>う御座いました。甚だ光栄又汗顔の次第であります。どうも年を取ると鉄面皮が益々ハードニングを受けて硬化するようであります。此れも「生きたい」ばかりの煩惱と御笑殺を願います、……」との書信があつた。以上の外、私の雑文雑著についての批評等、大正の始めの頃マツハヤポアンカレの科学根本論に関する感想など、思出の深いものが多いが、ここには省く。去年の春であつたか、同君の研究室を訪うたとき、ふと、「九十五位まで生きたいものだ」と漏らされたので、無條件で私も賛成したが、五十八歳を終つたばかりで早くも白玉楼中の人となられ、あの落着いた話振りも永久に聞かれなくなつた。

(昭和十一年三月、『思想』「寺田博士追悼号」)

- 桑木或雄著『科学史考』（河出書房、昭和一九年）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。